

---

# 長門のエラー

愚者

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

長門のエラー

### 【著者名】

ZZコード

Z3617F

### 【作者名】

愚者

### 【あらすじ】

ハルヒの望んだ大型台風によつて長門が親玉との連絡取れなくな  
り、暴走？！

side A (前書き)

ひどい文書とストーリーですが、お許しください。

あれは確か、熱くなり始めた6月のことだ・・・

夏を予期させる熱気が少しだけ出てきた6月。

期末テストを終え、後は夏休みを待つだけと言う限りなくやる気の失せるなか、SOS団は何も変化なく活動していた。

活動といつても、俺と古泉がボーネゲーム（古泉持参）をし、朝比奈さんがそれを覗き込み、長門が窓際で読書をし、ハルヒがパソコンを使ってネットサーフィン（死語）をしているだけだ。

「にしても・・・よく降るな・・・」俺がふと窓の外を見ると、朝から降り続いている雨はまだ降っていた。天気予報によると、台風が近づいているらしい。

「そうですねー、テルテル坊主さんもあまり対抗できていですねえ」朝比奈さんがメイド服のまま俺の呟きに答える。

そのとた

「ピンポンパンポン・・・1年5組の涼宮ハルヒさん、至急職員室まで来てください」放送だ・・・しかも呼び出し。

「・・・ハルヒ、お前何した？」俺があきれながら聞くと

「キヨン？ あたしは何もしていないわよっ！」睨まれた。

「なんにせよ、急いだほうがよろしいのでは？」古泉が笑顔のまま言つ。

「そうね、ちょっと行ってくるわ。今日はこじのまま解散、また明日ね」そう言つて、かばんを片手にハルヒは部室（文芸部室）を出て行つた。

「はい、また明日」古泉。

「あ、お疲れ様です」朝比奈さん。

「さよなら」長門。

「へこへこ、また明日な」俺の順に答え、かばんを持ち、部屋を出ようとすると

「待つて」長門にシャツの端を掴まれた。

「うん?」

「話がある」長門は俺をじっと見つめる。

「それなら、僕達はお先に」古泉と朝比奈さんが出て行く・・・  
「んで、どうした?」俺と長門だけの部屋。取り合えず、話を聞く。  
「説明が難しい。直接内容を伝達する」直接とは?とか、聞く暇は無かった。

「うおつ?」急にネクタイが引っ張られ、顔を近づけられ  
「動かないで」俺の額と長門の額がくっついた。少しのシャンプー  
の匂いと、長門の体温が額に伝わる・・・が、

「・・・つ!」額に一瞬の激痛が走ったと思つたら、いろいろなこ  
とが理解できた。つまり

「台風のせいでお前の親玉との連絡がつかなくなつて、その間自分が何をするか分からんんだな?」取り合えず、俺の解釈だとそうなる。

「そつ、今まで平気だつたけど、涼宮ハルヒが望むほどの台風は  
私に影響を及ぼす」ハルヒよ、もう少し平凡なことを望んでくれ。

「あー、わかった、俺が面倒見るから」取り合えず、笑つておく。  
「助かる」

「気にするな、いつもお前には助けてもらつてる」

俺たちはその後ほとんど無言のまま昇降口まで行き帰り「ひとすると」と

「あ・・・」俺のかさが無くなつていた。

「参つたな・・・誰かに持つていかれたか・・・」家まで走りうか  
と考えていると

「私の家に予備の傘がある」突然長門が言った。

「・・・そつか、ええと・・・借りてもいいか?」

「いい」

多分長門流の気遣いだろうな。そう思いながら

「すまないが、お前の家まで入れてくれ」そう言つと

「構わない」そう言つて、傘を開いて俺に渡した。まあ、俺のほう

が身長もあるし、傘ぐらい持つさ。

「ところでさ、いつ頃に親玉とのコンタクトは途切れるんだ?」帰

り道、相合傘をしながら聞くと

「細かくは分からないうが、今晚「珍しく、長門にも分からなによつ

だつた。

「随分唐突だな」

「涼宮ハルヒがそう望むから」ハルヒのせっかちめ。

「大丈夫なのか?」なんとなく聞いてみると

「問題ない」そういわれた。

この後俺らはまたほとんど会話をせず、長門の住むマンションに向かつたのだが・・・

「ふう・・・突然酷くなつたな、タオル借りていいか?」ほとんど  
びしょ濡れの俺が言つと、

「いい」そういいながら、風呂場らしきところに向かう。

「悪いな」と玄関で突つ立っていると

「上がつて」戻つた長門がタオルを差し出しながら俺に言つた。

「んーと、いいのか?」

「構わない」

「そうか、お邪魔します」タオルで髪や体を軽く拭きながら靴を脱いでお邪魔することにする。

「いらっしゃい」長門も自分で髪を拭きながら台所に歩いていく。

「うわあー、外はどんどん酷くなるな・・・」窓から外を見ながら

呟く。

「飲んで」振り返ると、お茶を入れてる長門がいた。

「サンキュー」初めてここに来たことを思い出しながら、長門の横に座り、出された茶を飲む。

そのまま、ゆつたりしていると・・・

「あ・・・・・」長門が頬を赤らめながら、俺のシャツをつまむ。

「ん？」驚きながら様子を伺うと

「情報統合思念体との「ノンタクト」が取れなくなつた」少し震えながら俺に呟つ。

「な、おい？ 大丈夫か？」長門の肩を掴んで「こちらを向かせるとピシャーン！」

外で雷が落ちるのとは、ほとんど同時だつた。

「・・・・・へえ！？」まばゆい光の後に、長門を見ると・・・・「えーと、これは猫耳？」長門の頭には、猫についてのとんでもりな耳がついており、本来あるはずの人間の耳は消えていた。

「大丈夫か？」俺が聞くと

「・・・・・問題にやい」・・・にやい？

「不快にや・・・」そう呟くと

「おいつ、長門！」なんと、長門は衣服を突然脱ぎだした。

「私は今の状態が不快にや」そつといなながら、服を脱ぎ、终いには、一糸まとわぬ姿になつた。

「ちよつと、待てつて！」急いでシャツだけでも着せて、いろんなものを俺の視界から隠す。

「何故？・・・・にや？」そつといながら、俺に擦り寄つてくる。正直、理性が飛びそうだつたのだが・・・

「頼むから理性を戻せつての！」肩を掴んで真正面から怒鳴ると「・・・・・うにやー」何をどう勘違いをしたのか抱きついてきやがつた。猫のよう。

そこまでされると俺も諦めることにして、「はあ・・・・・ため息をつきながら長門の頭を撫でた。そうすると長門は

「にやつ」と、嬉しそうに微笑んだ。いつもとのギャップもあってかわいい。

「取り合えず・・・・ちゃんと着うよ」長門の胸を氣にしつつ、袖に手を通させて、ボタンを留めた。

「にゃーにゃー」嫌そうに俺を見る。

「服着てないと風邪引くぞ」はたして、宇宙性のアンドロイドに地球産のウイルスが感染できるか分からんがな。

「にゅうー」眉を寄せて視線での講義をする長門。

「・・・・・」可愛さとか、いろんなものに負けてボタンを外し、シャツを脱がせないよに、俺はそっぽを向いた。

「にゅうー」「・・・」「ひたひー」「・・・」「にゃー」「・・・

俺はひたすら長門の抗議を無視した。すると・・・

「うにゃ」長門は自分でボタンを外そうとし始めた、実力行使。「はあ・・・・」またため息をついて、「借りるぞ」何度も入ったことのある和室に行き、掛け布団を持って戻り、

「ほりよ」長門のシャツのボタンだけを外して、布団をかける。これにより、長門を衣服は着てないが、布団をかけてあるので、俺には何も見えない。

「にゃ」またさつきのよに微笑み「にゃー」俺に頭を擦り寄せてきた。

「はいはい」頭を撫でてやる。

そうすると長門は暫く静かになつた。

改めて現状を確認すると

・台風によつて、長門は情報統合思念体とやらとの連絡がつかない。

・結果、何が影響を及ぼしたのか、長門は猫化している。

さて・・・どうしようか悩んでいると

「へくしゅつ」へしゃみをしてしまつた、体とかは拭いたが、冷え切つたままだ。

「にゃー」眉を寄せて心配するよくなつた長門が俺の腹部やら顔やらをぺたぺたと触る。くすぐつたいし、猫耳とかの効力もあつて結構可愛い・・・やばいな。

そう思いながら「大丈夫だから」そういうつて、微笑みながら頭を撫

でてやつた。だが、長門はまだ心配らしく

「にやにやー」俺と毛布を被ることにしたよつだ。

かくして、俺は長門と一緒に布団に包まれることに、よく分からぬ状況だ。

布団で見えないが、隣にいる長門は裸だし、猫だし、可愛いし・・・

考え込んでいると

「すー・・・すー・・・すー・・・」静かな寝息が聞こえてきた。長門は寝たようだ。

「まあ、そんなに悪い状況じゃないからいいか」さつきから俺の意識を奪おうと頑張つてゐる睡魔に屈することにし、俺は目を閉じた。

頬のくすぐったさを感じ、意識を戻すと

「あ・・・・・」長門が少し驚いた顔で俺の顔を撫でていた。

「・・・・・すまない、寝ちまつたか・・・」俺は長門に添い寝をする感じで横になつていた。

「・・・・構わない。私が原因」そつとつて、長門は布団を口元まで持ち上げた。

「・・・・・」違和感を感じ、自分のところだけ布団を捲ぐると・・・

「あなたのシャツは濡れていたから、乾燥機で乾燥させてる」長門が平坦な口調で言つた。

「・・・・・そつか、助かる」礼を言つ俺に

「・・・・・気にしなくていい。」平坦な返事。

会話が終わつた。もともと、長門は口数が少ないから、よくあることだが・・・・・

気まずい。

男と女が半裸で一つの布団に包まつてこるのは、経験が無いため、緊張する。

「…………大丈夫?」ふいに、長門が「ひつじを向いて聞く。「ん?」

「急激な体温の上昇を観測した。体調異常?」

緊張がそのまま熱になつてたらしい。

「いや、なんでもない。疲れてるだけだ」

「…………そう」

また会話が終わつた。俺は氣まずくなり、長門に背を向けた。すると・・・

「な、長門?・・・」背中に暖かい感触。

「何?」冷たい声。

首だけ回して後ろを確認すると、やつぱり、長門が抱きついていた。「どうかしたのか?」動搖を隠しながら聞くと「ひつしたいと想つた・・・何故かは不明」先ほどと同じような、冷たい声。

「…………俺は何も言えなくなつた。

「寂しいのか?」俺は前を向いて聞く。

「分からない・・・少し、声のトーンが落ちてるひつじを感じた。何故だか、いつもの長門より、感情の表し方が無骨な気がした。多分俺にしかわからないような変化だらうが。

「…………寂しい」後ろから、消えそうな声が聞こえた。

「そうか」俺は今度は体ごと向きを変えて長門を抱きしめた。顔を見るのは悪いと想つて、胸の辺りに長門の頭が来るひつじ。先ほどの緊張は不思議と消えていた・・・

背中に感じた暖かを胸に感じながら、俺は頭を撫でながら子守唄のよひに言ひ。

「寂しかつたら直ぐに言つてくれ。俺に出来る」とは少ないのでな長門が、ひつじの顔をしているか、見えないし、予想もつかなかつた。

「?」首に長門の手が来たかと思つた。

「…………」

「…」「唇に熱。視界には頬の赤い長門の顔。

ここで何かいうのも、無粋な気がしたし、なんとなく、なんとなくだが、俺は目を閉じてさつきより強く長門を抱きしめた。

数秒すると、唇に感じた熱は離れ、目を開けると、顔の赤い少女も下を向いていた。

「大丈夫か？」

「ヒラー、あなたとキスをしたいという欲望に抑えなかつた」少し、いつもと同じ顔に戻つた長門が不思議そうに俺に応える。

俺は、何をいいか分からず、ただ、長門の顔を見ていた。

「あ・・・・・」長門の耳がほんの少しだけ動き

「あなたのシャツの乾燥が終了した」布団から出て、乾燥機があるであろう浴室に向かう長門に

「あつ・・・・」俺は絶句し「・・・・・長門」と呼びかけた。

「何？」振り返る長門、

「服・・・・・は、ないから、被つてけ」俺は布団を長門に投げた。そう、長門は俺とは違い、全裸だつたのだ。

「必要ない」キヤッチしながら、断言する長門に

「俺の意識が錯乱する前に被つてくれ」俺はそっぽを向きながら長門に頼んだ。

「・・・・・了解した」布のこする音、「これでいい？」視線を戻すと

「離人形みたいだな」俺はつい言つてしまつたが、「そう・・・・」の一言でばっさり切り捨てられた。

そのあと、離人形（長門）に乾いたシャツを受け取つた俺はそれを着て、かばんを片手にすっかり日の落ちて暗くなつた住宅街を家路に着いた。

玄関から隠密モードで自室に帰還したものの、ベッドに倒れることは出来なかつた。先客がいたからだ。

「うーん、シャミー」妹だ。髪を縛つてなくて、パジャマと言つ

ことは、風呂上りだらう。起きて騒がれるのも面倒だから、俺は椅子で寝ることにした。

翌日、俺は一つだけ、誰にもいえないことをした。

「キヨン君、テルテル逆さだよ？」妹の声が俺に聞こえた。

終わり。

side A (後書き)

ただ単に、長門を壊したかつただけです。  
すみませんでした。

無謀なぐらいに壊してみました。

あれは確か、熱くなり始めた6月のことだ……

夏を予期させる熱気が少しだけ出てきた6月。

期末テストを終え、後は夏休みを待つだけと言う限りなくやる気の失せるなか、SOS団は何も変化なく活動していた。

活動といつても、俺と古泉がボーネゲーム（古泉持参）をし、朝比奈さんがそれを覗き込み、長門が窓際で読書をし、ハルヒがパソコンを使ってネットサーフィン（死語）をしているだけだ。

「にしても・・・よく降るな・・・」俺がふと窓の外を見ると、朝から降り続いている雨はまだ降っていた。天気予報によると、台風が近づいているらしい。

「そうですねー、テルテル坊主さんもあまり対抗できていですねえ」朝比奈さんがメイド服のまま俺の呟きに答える。

そのとた

「ピンポンパンポン・・・1年5組の涼宮ハルヒさん、至急職員室まで来てください」放送だ・・・しかも呼び出し。

「・・・ハルヒ、お前何した？」俺があきれながら聞くと

「キヨン？ あたしは何もしていないわよっ！」睨まれた。

「なんにせよ、急いだほうがよろしいのでは？」古泉が笑顔のまま言つ。

「そうね、ちょっと行ってくるわ。今日はこじのまま解散、また明日ね」そう言つて、かばんを片手にハルヒは部室（文芸部室）を出て行つた。

「はい、また明日」古泉。

「あ、お疲れ様です」朝比奈さん。

「さよなら」長門。

「へこへこ、また明日な」俺の順に答え、かばんを持ち、部屋を出ようとすると

「待つて」長門にシャツの端を掴まれた。

「うん?」

「話がある」長門は俺をじっと見つめる。

「それなら、僕達はお先に」古泉と朝比奈さんが出て行く・・・  
「んで、どうした?」俺と長門だけの部屋。取り合えず、話を聞く。  
「説明が難しい。直接内容を伝達する」直接とは?とか、聞く暇は無かった。

「うおつ?」急にネクタイが引っ張られ、顔を近づけられ  
「動かないで」俺の額と長門の額がくっついた。少しのシャンプー  
の匂いと、長門の体温が額に伝わる・・・が、

「・・・つ!」額に一瞬の激痛が走ったと思つたら、いろいろなこ  
とが理解できた。つまり

「台風のせいでお前の親玉との連絡がつかなくなつて、その間自分が何をするか分からんんだな?」取り合えず、俺の解釈だとそうなる。

「そつ、今まで平気だつたけど、涼宮ハルヒが望むほどの台風は  
私に影響を及ぼす」ハルヒよ、もう少し平凡なことを望んでくれ。

「あー、わかった、俺が面倒見るから」取り合えず、笑つておく。  
「助かる」

「気にするな、いつもお前には助けてもらつてる」

俺たちはその後ほとんど無言のまま昇降口まで行き帰り「ひとすると」と

「あ・・・」俺のかさが無くなつていた。

「参つたな・・・誰かに持つていかれたか・・・」家まで走りうか  
と考えていると

「私の家に予備の傘がある」突然長門が言った。

「・・・そつか、ええと・・・借りてもいいか?」

「いい」

多分長門流の気遣いだろうな。そう思いながら

「すまないが、お前の家まで入れてくれ」そう言つと

「構わない」そう言つて、傘を開いて俺に渡した。まあ、俺のほう

が身長もあるし、傘ぐらい持つさ。

「ところでさ、いつ頃に親玉とのコンタクトは途切れるんだ?」帰り道、相合傘をしながら聞くと

「細かくは分からないうが、今晚「珍しく、長門にも分からなによつたた。

「随分唐突だな」

「涼宮ハルヒがそう望むから」ハルヒのせっかちめ。

「大丈夫なのか?」なんとなく聞いてみると

「問題ない」そういわれた。

この後俺らはまたほとんど会話をせず、長門の住むマンションに向かったのだが・・・

「ふう・・・突然酷くなつたな、タオル借りていいか?」ほとんどびしょ濡れの俺が言つと、

「いい」そういいながら、風呂場らしきところに向かう。

「悪いな」と玄関で突つ立っていると

「上がつて」戻つた長門がタオルを差し出しながら俺に言つた。

「んーと、いいのか?」

「構わない」

「そうか、お邪魔します」タオルで髪や体を軽く拭きながら靴を脱いでお邪魔することにする。

「いらっしゃい」長門も自分で髪を拭きながら台所に歩いていく。

「うわあー、外はどんどん酷くなるな・・・」窓から外を見ながら呟く。

「飲んで」振り返ると、お茶を入れてる長門がいた。

「サンキュー」初めてここに来たことを思い出しながら、長門の横に座り、出された茶を飲む。

そのまま、ゆつたりしていると・・・

「あ・・・・・」長門が頬を赤らめながら、俺のシャツをつまむ。

「ん？」驚きながら様子を伺うと

「情報統合思念体との「ノンタクト」が取れなくなつた」少し震えながら俺に呟つ。

「な、おい？ 大丈夫か？」長門の肩を掴んで「こちらを向かせるとピシャーン！」

外で雷が落ちるのとは、ほとんど同時だつた。

「・・・・・へえ！？」まばゆい光の後に、長門を見ると・・・・「えーと、これは猫耳？」長門の頭には、猫についてのとんでもりな耳がついており、本来あるはずの人間の耳は消えていた。

「大丈夫か？」俺が聞くと

「・・・・・問題にやい」・・・にやい？

「不快にや・・・」そう呟くと

「おいつ、長門！」なんと、長門は衣服を突然脱ぎだした。

「私は今の状態が不快にや」そつといながら、服を脱ぎ、终いには、一糸まとわぬ姿になつた。

「ちよつと、待てつて！」急いでシャツだけでも着せて、いろんなものを俺の視界から隠す。

「何故？・・・・にや？」そつといながら、俺に擦り寄つてくる。正直、理性が飛びそうだつたのだが・・・

「頼むから理性を戻せつての！」肩を掴んで真正面から怒鳴ると・・・・・うにやー」何をどう勘違いをしたのか抱きついてきやがつた。猫のよう。

そこまでされると俺も諦めることにして、「はあ・・・・・ため息をつきながら長門の頭を撫でた。そうすると長門は

「にやつ」と、嬉しそうに微笑んだ。いつもとのギャップもあってかわいい。

「取り合えず・・・・ちゃんと着うよ」長門の胸を氣にしつつ、袖に手を通させて、ボタンを留めた。

「にゃーにゃー」嫌そうに俺を見る。

「服着てないと風邪引くぞ」はたして、宇宙性のアンドロイドに地球産のウイルスが感染できるか分からんがな。

「にゅうー」眉を寄せて視線での講義をする長門。

「・・・・・」可愛さとか、いろんなものに負けてボタンを外し、シャツを脱がせないよに、俺はそっぽを向いた。

「にゅうー」「・・・」「ひたひー」「・・・」「にゃー」「・・・

俺はひたすら長門の抗議を無視した。すると・・・

「うにゃ」長門は自分で場たんを外そうとし始めた、実力行使。「はあ・・・・」またため息をついて、「借りるぞ」何度も入ったことのある和室に行き、掛け布団を持って戻り、

「ほりよ」長門のシャツのボタンだけを外して、布団をかける。これにより、長門を衣服は着てないが、布団をかけてあるので、俺には何も見えない。

「にゃ」またさつきのよに微笑み「にゃー」俺に頭を擦り寄せてきた。

「はいはい」頭を撫でてやる。

そうすると長門は暫く静かになつた。

改めて現状を確認すると

・台風によつて、長門は情報統合思念体とやらとの連絡がつかない。

- ・結果、何が影響を及ぼしたのか、長門は猫化している。

さて・・・どうしようか悩んでいると

「へくしゅつ」へしゃみをしてしまつた、体とかは拭いたが、冷え切つたままだ。

「にゃー」眉を寄せて心配するよな顔になつた長門が俺の腹部やら顔やらをぺたぺたと触る。くすぐつたいし、猫耳とかの効力もあつて結構可愛い・・・やばいな。

そう思いながら「大丈夫だから」そういうつて、微笑みながら頭を撫

でてやつた。だが、長門はまだ心配らしく

「にやにやー」俺と毛布を被ることにしたよつだ。

かくして、俺は長門と一緒に布団に包まるところ、よく分からぬ状況だ。

布団で見えないが、隣にいる長門は裸だし、猫だし、可愛いし……

考え込んでいると

「すー・・・すー・・・すー・・・」静かな寝息が聞こえてきた。長門は寝たようだ。

「まあ、そんなに悪い状況じゃないからいいか」さつきから俺の意識を奪おうと頑張ってる睡魔に屈することにし、俺は目を閉じた。

いつたい何時間たつたのだろうか……

「起きて……俺の頬に少し冷たい手が当たられてるのが分かる。」「うう……」睡魔から意識を奪還し、目を開くと「台風は30分23秒前に去った……今は12時45分39秒」俺の顔から数センチ向こうに長門の無表情があつた。

「……おはよう」長門が先に挨拶をし「ああ、おはよう」俺が返した。状況はすぐに理解できた。

俺と長門は一人で布団に包まつており、今は深夜。

「……12時?」俺が恐る恐る聞く。

「……12時」顎を数ミクロン動かして、肯定する長門。  
なんてこつた!俺は急いで立ち上がり、「すまない、長門しちまつた」

「構わない、私が原因」

振り返つてみたら、長門は裸のままだった。わずかに落ちた布団から、白い肌が見えている。

「あ……」思わず、俺の口は止まつたが「すまない!」すぐにそっぽを向くべらりの思考は働いた。

「……気にしないくていい」俺の視線やら何やらを察したのが、長門は布団を戻し、肌を隠した。

「……ええと、じゃあ、今日は、帰るな」苦し紛れにそういう残し、俺はかばんを持って、長門の部屋を出た。

急いで家に戻り、静まつた家の中を隠密行動し、自室に戻ると

「ぐー・ぐー・ぐー・ぐー」

「・・・・・」せ

俺の布団でシャミと戯れていたらしい妹と

「・・・・・助けてくれないか？」妙に達観した猫がいた。

妹の右手はシャミの腹の部分に乗つており、シャミは身動きが出来ないようだ。

「・・・・・はあ・・・・・ほひよ」妹を起さないよ、腕をどうかしてやると

「・・・・・すまない、恩に着る」そういう残し、わずかに開いていたドアから廊下に消えた。

「おやすみ」ベッドは妹の支配下にあるため、俺は椅子で練ることにした。

何、最近暖かいし、風邪なんか引くことはないだろ？  
先ほどの睡魔たちに、意識を譲渡し、俺は夢の世界に飛んだ。

・

少し、後日談だ。

その後、寝坊しそうになりながらも、学校に行き、長門のいるクラスを覗いてみると、普段どおりの長門がいた。

放課後に部室に行つたときも

「昨日は、迷惑をかけた」と、頭を下げられた。

「気にするな、俺はお前に何度も助けられてるんだから

・・・そう」どうやら、長門は完全に戻ったようだ。

その日、俺は家に帰つて一つだけ、誰にも言えないことをした。

「キヨン君ー、てるてる逆さだよー？」  
俺の部屋の窓に、逆さまのテルテル坊主が、その日限りで存在した。  
終わり。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3617f/>

---

長門のエラー

2010年10月11日18時23分発行